

第2回大会報告

研究大会を終えて

丹羽 孝（名古屋市立大学 第2回大会実行委員長）

今回、幼児教育史学会第2回研究大会が成功裏に開催された。

あいにくの天候の影響もあって参加者数は少なかったが、宮沢康人東京人学名誉教授、岡田正章聖徳大学教授(もと日本保育学会会長)等の長老のご参加、又幼児教育史研究を志す若い研究者の参加もあったことが特徴的だった。

研究大会は午前中に自由研究発表4本が行われた。内2本が日本、その他がイタリア及びドイツに関する外国史研究であった。日本における歴史研究に関する第一発表者は「野村芳兵衛における生活教育の取り組み」(布村志保)で、野村の「自然観察から自然遊び」への発展的指導の内容に関する研究であった。彼女はこのところ野村の保育思想史研究に集中しており、野村の自然教育思想の新しい側面の発見を試みたものだった。次の太田教授は、既に一定の評価を得ている研究者であるが、彼女の研究主題である回想記を素材とする育児思想分析は、こんかいかも又ユニークで興味深いものだった。



外国史については今回坂入会員(東京家政大学)の「ルソー、ペスタロッチ、フレーベル」の思想史的關係性の究明は、改めてこの主題が今目でもなお多くの示唆を与えてくれる重要な主題であることが示された。他方オムリ慶子会員は日本では殆ど知られていない、イタリア最初の無償幼児学校の設定者であるアポルテイメソッドについて研究報告を行ったが、大変貴重な報告となった。今後の発展が期待される。

午後には「日本における幼児教育史研究の到達点と課題」と題する研究シンポジウムが行われた。日本教育史研究の第一人者である宍戸会長の下での適切な研究課題であった。

シンポジウムは日本幼児教育史研究の総括を湯川嘉津美会員が報告した。近年の研究状況を視野に入れて、歴史研究における先行研究の厳密な精査の必要性を強調されたことは印象的だった。アメリカについては阿部真美子会員が報告した。阿部会員は日本におけるアメリカ幼児教育研究の歴史をトレースしながら、幼稚園教育課程史研究、幼稚園教員養成制度史研究等具体的に、いくつかの今後の課題を提示された。又、第一次資料の重要性について言及され、「なぜ日本でアメリカ幼児教育史研究をするのか」という問題意識の問い直しを強調されたことは印象的だった。最後に勝山会員はヨーロッパ(ドイツ中心に)、荘司学派、岩崎学派によるフレーベル研究の特徴と内容を紹介しながら、詳細な先行研究整理を紹介された。そこからは今後幼児教育史学会として、早急に取り組まなければならない多くの課題が示唆されたように思われる。



次回以後、今回の問題提起を学会として大切にしたい。地方教育史の積極的な取り組み、幼児教育史学会として日本幼児教育の通史研究への取り組み等の大切な課題を具体化することが要請されている。

最後に、このシンポジウムの成果を高く評価すると共に、「アジア幼児教育史研究」への取り組みの必要性を指摘しておきたい。やはり日本の幼児教育史研究の課題として重要だというべきだろう。具体的な取り組みを、次回以後に期待したい。



研究発表

司会 勅使千鶴（日本福祉大学）／山田美香（名古屋市立大学）

- ① 野村芳兵衛における生活教育の取り組み
－「自然観察」から「自然あそび」へ－
布村志保（立教大学大学院）
- ② アポルティ・メソッドにおける言語教育
－その方法論と背景－
オムリ慶子（大阪キリスト教短期大学）
- ③ 回想の中の幼年期
－近世自叙伝・回想記の中の間人像としつけ文化－太田素子（埼玉県立大学）
- ④ J. J. Rousseau 教育思想の J.H.Pestalozzi 及び F.Flöbel のそれへの関連性について
－幼児教育思想の発展を中心として－
坂入 明（東京家政大学）

シンポジウム

司会・指定討論者：竹内通夫（金城学院大学）／梶瑞希子（聖徳大学短期大学部）

「日本における幼児教育史研究の到達点と課題」
趣旨説明 宍戸健夫（同朋大学）

報告 1：日本幼児教育史研究の立場から

湯川嘉津美（上智大学）

報告 2：アメリカ幼児教育史研究の到達点と課題

阿部真美子（山梨県立大学）

報告 3：ドイツ語圏（特にフレーベル）を対象とした幼児教育史研究の到達点と課題
勝山吉章（福岡大学）